

# としょかんNEWS 第102号



2015年9月11日  
湘北短期大学 図書館

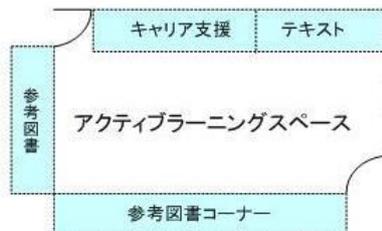
## 図書館改装のお知らせ

### ●「アクティブラーニングスペース」完成！

2015年9月、図書館2階に個室風のグループ学習室「アクティブラーニングスペース」が新設されました。アクティブラーニングスペースは、定員約21名(イス3脚×7テーブル)のグループ学習室。事前にお申し込みいただくと授業・ゼミ等のグループでの貸切利用ができます。また、予約が入っていない時間帯は、どなたでも自由に利用することができます。貸切利用を希望される方は、図書館ITコンシェルジュ(itcon@shohoku.ac.jp)までお問い合わせください。

なお、アクティブラーニングスペース新設に伴う、書架の移動先は下記の〈書架配置図〉のとおりです。資格試験対策コーナーは3階学術雑誌コーナーへ移動しました。

#### 〈書架配置図〉



## さぽーち倶楽部、活動報告

### ● 夏休みの遠足で、代官山 蔦谷書店を見学！

さぽーち倶楽部の夏休みの遠足として、9月3日に店頭選書ツアーと書店の見学を行い、7名のメンバーが参加しました。

#### 【選書ツアー at 三省堂書店 神保町本店】

三省堂書店の神保町本店で、さぽーち倶楽部としての選書ツアーを行い、合計96冊の本が選ばれました。選ばれた本は、図書館のさぽーち倶楽部コーナーに展示しますので、ぜひご覧ください。



#### 【代官山 蔦谷書店の見学】

午後は、代官山 蔦谷書店に移動し、店舗の見学を行いました。売り場のディスプレイや本を紹介するポップを見て回り、コンシェルジュの方に売り場づくりやイベント企画について、インタビューしました。

都内の大型書店を2店舗じっくり見学することができ、有意義な遠足となりました。いずれの書店も初めて訪れたメンバーが多く、今後の活動の刺激になったようです。

この1年で我が家の本棚には少しずつ絵本が増えています。その中から今回は、娘の初めての絵本に選んだ「しろくまちゃんのほっとけーき(わかやまけん、1972年)」についてのエピソードを紹介します。

娘が2か月を過ぎて初めての絵本を考え始めました。真面目に考え始めると、選べなくなりそうなほど魅力あふれる絵本はたくさん！そこで、2つだけ条件を決め、あとはその時の感覚に任せることにしました。決めた条件は「自分が好きだった絵本」、「色使いがはっきりした絵本」の2つです。書店に入ってすぐにオレンジ色の鮮やかな表紙が目に入り、「これ好きだった！」と、買い物はあっという間に終わりました。

さて、どんな反応を娘はするのだろうと読んで聞かせると…じいっとみえています。ページをめくってもじい。とあるページでは目が左右にきよろきよろ…。さらにページをめくるとまたじい…。視線の動きがまるで話をわかって聞き入っているようで、その様子がたまらなく、毎日毎日飽きもせず読んで聞かせました。

なぜ娘が聞き入っているように見えたのか…絵本を選んだときには気づかなかったのですが、それは絵本のづくりに秘密がありました。この絵本は、はじめは左に絵が、右に文字があり、絵本のちょうど真ん中で

全面に絵が描かれているページが登場します。そして残りのページでは絵と文字の左右が逆転します。発達心理学で言われるように赤ちゃんは、はっきりとした色や顔によく注目しますが、この絵本の絵の配置は赤ちゃん(娘)の視線の動きが大人(私)にとってわかりやすく、絵本に聞き入っているようにみえたのです。

さて、しばらくおとなしく毎日毎日「しろくまちゃんのほっとけーき」に聞き入っていた(ように見えた)娘ですが、そのうち「絵本はめくって楽しむ物でしょ！」という様子でとにかくページをめくることにはまっていきました。その後「本棚の絵本はとにかく引っ張り出すぞ!」、「絵本は持って歩くだけで楽しいぞ!」など、いろんな絵本とおつきあいの仕方をしています。

そして、1歳を過ぎてお気に入りの絵本が少しずつできてきたようです。「しろくまちゃんのほっとけーき」は現在ランク外…。最近の娘のブームは「もこもここ(谷川俊太郎/作・本永定正/絵、1977年)」、そして「だるまさんが(かがくいひろし、2008年)」のあたりでしょうか。それぞれお気に入りのページがあり、「あのページを早く早く!」という様子を見せてくれます。このお気に入りページにも気に入る理由がありそうなのですが、またそれは機会があれば…。

8月15日は、「悲惨な戦争を二度と起こさないことをちかい、平和をいのるための『終戦の日』」で、「戦争の記憶を語りつぐさまざまな取り組みがなされています」と説明されている(『新しい社会』6年上、東京書籍)。その前日、政府は臨時閣議を開き、戦後70年の安倍晋三首相談話を決定、「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきました」と述べたものの、「侵略」「植民地支配」「おわび」などのキーワードは首相自身の言葉としては示されなかった。外務省出身の佐藤優氏は「会見を見ても心がこもっているとは思えなかった。話者の誠実性に疑念がある談話は、すぐに忘れられるだろう」と論評した(『毎日新聞』)。安倍談話のモヤモヤ感を振り払うべく、私は福井県の武生(現:越前市)を訪ねることを思い立った。ここには「かこさとし ふるさと絵本館 館 榎」があることを思い出し、調べてみると15日は表題の記念館も開いていることがわかった。ちひろの美術館といえば、東京練馬区と長野県の安曇野を思い起こすが、なぜ武生なのか——ちひろの母・文江は松本市に生まれ、奈良女子高等師範学校に第一期生として学び、卒業と同時に武生町立実科高等女学校へ赴任、五年後に

結婚、やがて1918年(大正7)12月15日の雪の日に知弘を出産したことによる(上坂紀夫『雪の降る朝—岩崎文江と娘ちひろ—』、2006年)。

戦後、ちひろは日本共産党と出会い、「人民新聞」に絵も描ける記者として採用されたが、ちひろの絵は労働者の強さや逞しさを表現していないと非難される。ちひろが描きたかったのは子どもだった。その契機は、アンデルセンの『お母さんの話』の紙芝居の絵を描いて欲しいという依頼であった。やがて松本善明と結婚、長男 猛を生むものの、生活と育児の両立ができず、猛を安曇野の開拓村の両親に預ける。ちひろは旅費の工面ができると、猛に会いにいった。ここに、ちひろがモデルなしに月齢ごとの赤ちゃんを描き分けられる秘密があった。そして、ちひろの願いは「愛と平和」である。ベトナム戦争に取材した『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店、1973年)にはあと書きがあり、「戦場にいかなくても戦火のなかで子どもたちがどうしているのか、どうなってしまうのかよくわかるのです。子どもはそのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界中みんなおんなじなんだからです」とある。いま、ちひろの歩んできた道と、対象に対する暖かいまなざしによる絵を吟味することは意義深いことと思われる。